
サイレント・ミュージック

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイレント・ミュージック

【Nコード】

N3612Q

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

某ゴンドラ会社に勤める営業の北原と設計の吉村。

これは、とつても大事なわたしのお友達に去年のクリスマス用として献上した短編です。現在、このシリーズはどこにも掲載しておりません。

スモークガラスの自動ドアが背後で閉じて、十二月の冷気を遮断する。

北原貴志はほっと息をついて、首に巻いていたマフラーをはずしながら、入り口に向いて置かれた受付の横を通り過ぎる。ロビーはエアコンのせいで暖かいが、妙にガランとした雰囲気だ。道路に面した窓際にはパーテーションで区切った応接スペースが三カ所作られているが、いまは無人。以前は受付係の女性が座っていた場所も、人の代わりに呼び出し用の内線電話が置かれている。電話の隣に置かれた観葉植物の鉢も、いずれレンタルから交換不要の造りものに変わるかもしれない。

リーマン・ショックのあと、建設業界は業績がふるわない。大型商業施設の建築が先延ばしになり、高層ビルの建設計画も年末をまえにして動きが止まった。動いているのは仕掛かり中の物件ばかりだ。そうなってくると、業界の一端にぶらさがっている北原の会社もあおりを食らう。建物が建ってくれないと、その屋上に設置するべきゴンドラ設備の出番はない。工事現場で動かすレンタルのゴンドラ機材もおよびではない。

コートのボタンをはずしながらため息をついて、エレベーターに向かう。二基あるエレベーターが上の階で停まっているを確認してから、昇降ボタンを押した。降りてくるのを待つあいだにコートを脱いで腕にかける。ひやり、とした冷気がまとわりついているのを感じた。

(やっぱり、こっちは寒い)

一年半前まで住んでいた、大阪の暖かさが懐かしい。東京は、気温だけでも五、六度は低いと感じる。街の大きさもケタ違いだ。だから、細々ながらも仕事があった。

すでに設置済みのゴンドラを、新しいものに乗せ替える営業

それが北原の部署だった。新規物件がほとんど動き出さない情勢のなか、発足から一年で大きな期待が寄せられている。

可愛らしい音色のチャイムが鳴ってドアがひらく。乗り込んで、三階のボタンを押した。

自社ビルは、一階が受付、二階が人事総務、三階に営業があつて、階ごとに部門が決まっている。

三階で降りるとエレベーターホールの両脇に廊下が走っている。北原は左側の廊下に進んだ。男子トイレの前を通り、ガラスで仕切られた休憩室を過ぎ、突き当たりのドアをあける。

中に入ると広いスペースが広がっていた。窓ガラスはすべてはめ込み式のグラスウォールで視界が広く、寒そうな灰色の雲と沈みかかる巨大な太陽の残照が見えた。室内は課ごとにパーティションで区切られ、天井からは営業一課、二課、と案内板がぶら下がっている。

北原は、視線の合った同僚たちに「お疲れさま」と声をかけたり、かけられたりしながら奥まで進み、ようやく自分のデスクに鞆を置いた。

「どうだった」

デスクでパソコン画面を睨んでいる課長が顔をちよつとあげて言う。

「さんざんでした。請求金額の二割も査定くらっちゃまって、もう」

立ったままで鞆をあけて、クリアフォルダーに挟んだ請求書を取り出す。

「幾らだ」

「工事進行の三割、たったの四十万で」

やられたなあ、と課長が唸った。

「施主側の懐具合が苦しいんでしょう」

フォルダーごと請求書を手渡し、ようやく席につく。ぶつぶつと、課長が呟いているのが聞こえた。どうやら、物件の資金回収状況を入力している最中らしい。呟きは、物件名から始まって、今日の日

付、請求金額に消費税額、と続いて終わる。呟きに合わせて、キーボードがカチャカチャとリズムカルに鳴っていた。

「北原、ここ、いつ支払い予定だ」

翌々月の十日、と答えてからつけ加える。

「たしか、手形が半分でした」

「手形かぁ。渋いなぁ」

北原は同調するように肩をすくめてうなずき、パソコンを立ち上げる。

まずは、メールを確認した。

外出してからまた、あらたに二十通ちかいメールが届いていた。業務通達ばかりだが、そこに珍しい人物からのものが一通まぎれている。

（まさか、また、俺にシステムをやれとか言うんじゃねえだろうな）
以前手伝わされたことを思い出して、警戒しながら開封する。そして、短い文面に首をひねった。

北原サブリーダー殿

内線、請う システム部 相楽

（なんだろうな）

北原はパソコンの左側に手を伸ばし、ビジネスフォンの受話器を取り上げる。社内番号表を確認して、相手呼び出した。

三秒経たずにつながった。

「システム部、相楽です」

さわやかな感じのテノールが歯切れよく答える。

「相楽リーダー？ メールを見た……」

「北原くん！ いやぁ、きみの帰りを待っていたよ」

「なんなんですか。まさかまた、例の」

「いや、違うちがう」

最後までセリフを言わせてもらえない。

「システムは順調に動いているよ」

「だったら」

「北原くん、きみ、ちよつと時間あるかな」

四階の休憩室はほかの階のそれより広い。日当たりのいい南東の角にあり、ガラスの自動ドアを抜けると自動販売機が三台、右側のすみに設置されている。床から天井まである窓に沿ってぐるりと力ウンターテーブルが取り付けられ、それは透明な仕切りで区切られた喫煙ルームまで続いている。あちこちに背の高い観葉植物の鉢が置いてあり、つやつやとしたグリーンの葉を茂らせている。

相楽はテーブルの前に背中を見せて立っている。声をかけると振り向いて、さわやかな笑顔を見せた。

「悪いね、呼び出して」

なにか飲むか、と訊かれたのでコーヒー、と答える。

「砂糖は？」

「ミルクだけで」

濃紺のスラックスのポケットから小銭を取り出しながら、目の前を横切っていく。そうされると、嫌でも自分のほうが低いとわかる。しかし、本当なら悲観するほど低くはないのだ。相楽が高すぎるのである。一九五センチ。十センチも高い。

小銭がチャリン、チャリン、と落ちていく音が夕闇の忍び込む休憩室に響いた。見ていると、相楽の指が三種類ある銘柄のうち、いちばん高いやつボタンを押した。機械がドリップしていく唸りを聞くうち、嫌な予感に包まれる。

「どうぞ」

手渡されたカップの中身を、黙って見下ろした。暖かそうな湯気が立ち、挽きたての豆のいい香りが鼻腔をくすぐる。しばらく逡巡してから、口をつけた。

「それで？」

「まあ、ちよつと座らないか」

相楽がカウンター席に腰を下ろして誘うが、立ったままでいた。

長身の男を見下ろすのは、気分がいい。

「悩みごとがあつてね」

両手の指を組み合わせ、片方の肘をカウンターに乗せて足を組む。そういう格好がまた、キザで似合っていた。

「そうなんですか」

「冷たいなあ、きみ。話に聞いたのとギャップがあるじゃないか」

誰から聞いた、と言う代わりに脳裏にある顔を思い浮かべる。まつげの長い、印象的な瞳をメガネで隠している恋人の顔。

「俺は、特定の人間にだけやさしいんです。っていうか、相楽さん。吉村にちょっかい出してんじゃないでしょうね。ちゃんと恋人いるでしょうが、自分」

三十三歳の先輩にむかつて、対等な口をきく。仕事ならみならば相手を立てるが、そうでないとわかった以上、五歳の年齢差はナワバリ意識の前にふつとんだ。

「もちろん」

相楽の笑顔には余裕がある。が、急に困った顔をした。

「相談したいのは、その恋人のことなんだよね」

「なんで、俺が」

「だってきみ、料理が得意なんだろう？」

あの馬鹿、そんなことまで話したのか。

心のなかで恋人をののしってから、あらためて相楽を見下ろす。

「僕の恋人はモデルだって、言ったことあつたかな」

北原は、ずずつ、と音をさせてコーヒースプーンをすすった。

「だから、ウエイト・コントロールに普段から気をつかっている」
相楽の顔から目をそらし、窓の外に広がる紫色に染まっていく夕闇を見る。

「食事はたいてい僕のところだとるんだけど」

紙カップのふちに歯をたてて、ギザギザの歯形を入れた。

「なんでも大きな仕事がいって、一ミリも体型を崩すな、と言われたらしいんだ」

「それが、俺と、どんな関係があるんですか」

「おおありだよ。恋人にとって、その仕事がどれだけ大きなチャンスかよくわかってる。だから、僕はべつにケーキもチキンもシャンパンもなくてもかまわない。クリスマス之夜と一緒にいられるならね」

ととうとう飲みきった空のカップの底から、相楽の顔に視線を戻した。

「だが、それをマリーが気にするんだ」

「マリー？」

「モデル名だよ」

言いながら微笑んだ顔が、恋する男そのものだ。恋人のことを思うだけで、心のなかが潤いで満たされて、自然に湧いてくる表情。

北原は、ため息をついた。手のなかでカップをくしゃりと握りつぶし、軽く腕を上げると手首のスナップを効かせて壁際のダストボックスめがけて投げる。白と茶色の紙のかたまりが空を飛び、命中していた。

「ナイスシュート」

「それで、相楽さんは俺になにをして欲しいんです？」

上着の前を外しながら訊いた。

思わぬことで時間をとられた。

北原は相楽と別れたあと急いでデスクに戻り、残りの仕事を片づけにかかる。

一つめは、九階建て三十メートルのビルに乗せ替えるゴンドラの見積作成。これは問題がない。ビルの前面道路は片道二車線と広くゴンドラも小型なのでクレーン車で上げ下ろし可能だ。費用も安く、工期も短くて済む。

問題は、もう一つの物件だ。

建物の高さは一三〇メートル、前面道路の幅は六メートル。上げ下ろしすべきゴンドラのケージも本体も、かなり大きい。それはいいが、問題は使えるクレーン車が大型しかないことだった。道幅が

まったく足りない。

「課長」

借りてきた図面をしばらく覗んでから、声をかける。

「ちよっと、五階に相談に行ってくださいます」

分厚い図面を抱えて席を立った。

「それで今日の仕事は終わりかな？」

「あと、日報あげたら」

「こっちはお先に失礼するけど、いいかな？」

どうぞ、と答えて営業部を出た。

五階には、設計部がある。エレベーターを降りるとフロアの雰囲気はがらりと変わる。しん、と静まり返り人っ子ひとりいないかと思っぐらいだ。しかし、いる。部員は総勢二十五名。ここから、工事現場用のゴンドラや建物に設置される常設ゴンドラ、狭い場所で活躍するイス型ゴンドラが生み出される。現場用以外、そのほとんどが半オーダーメイド。様々な形状のビルに合わせて一つずつ設計されている。部員はそれぞれ個別のブースを割り当てられ、仕切られたパーティションの中にデスクと設計用のパソコンと電話機を与えられていた。

（相変わらず、息苦しい雰囲気だな）

気軽に話ができない空気に、足音どころか呼吸さえ殺して歩く。

無意識にワイシャツの襟に指を入れてゆるめた。

いくつもあるブースの前を通り過ぎ、目的の場所で足を止めると、画面に向かって集中している青年の顔を眺める。

カチ、カチカチ、カチ　とマウスを操作している音だけが狭い空間に響いている。長くてきれいな形をした指が的確に、一瞬も迷わずデスクの片隅でくると動き、クリックする。ふちなし眼鏡のレンズに、画面上の図形が映っている。白の背景に黒の直線と曲線の幾何学模様。長いまつげが瞳を半分隠して、頬に影を落としてる。無造作に分けられた前髪が眼鏡のフレームに少しだけかかって、つい、それを掻き上げてやりたくなった。

「吉村」

周囲をはばかり、小声で呼ぶ。が、気づかない。仕事に集中しているときの恋人の顔は、いつも冷たく整ってまるでガラスの表面のように人を寄せつけない。

コンコン、とパーテーションを拳で叩いて注意を惹く。やっと、顔を上げた。

「いま、いいか？ ちょっと、相談に乗って欲しいんだけどな」

「いいよ」

つるりとしたガラスの殻が破れて、やっと表情が戻る。急に人間らしくなった。頬にかすかな笑みさえ浮かべて椅子を回し、脇机に向く。北原は向かい合う形で空いた椅子に腰を下ろした。

「また、プラモデルをやってくれないかな。どう考えても、ゴンドラー基丸まんま揚重すんのは無理そうだ」

言いながらごつい図面をデスクに乗せた。

「見せて」

図面を引き寄せ、ページをめくっていく。その左の薬指には指輪がはまっている。女物と男物の中間ぐらいの太さの銀色の指輪。それと対の指輪は、北原の指にもはまっていた。吉村のそれよりごつい造りだから、他人が見てもペアリングとはわからない。しかし、裏には互いのイニシャルが彫られている。

「前のは、A-?型、昭和六十年代製造か。相当古い」

吉村がつぶやく。

「古い。レールも交換しないと動かせないぐらいだ。オーバーホールも十五年前、この四、五年は性能検査も受けてない」

うつむいたままで視線だけを上げた吉村の目と目が合う。ちょっと目を見張った驚いた顔に、たまらず微笑みかけてしまう。

「メンテナンスなしなんだ？」

「そう。ところが、オーナーが変わって急に全面改装をやることになったらしい。耐震調査から補強工事、外壁補修、と半年間でやっちまう。だから、ゴンドラも新調したいっていう有り難い話で」

「予算は」

「さあ　そこだ」

ぎしり、と椅子の背もたれを軋ませて座りなおした。

「安けりや安いに越したことはない　といつても、前面道路は六メートル。だから、一三〇を越える高さまで伸ばせるクレーン車は使えない」

「アウトリガーが出ないな」

「出ない。十メートルないとな。車体が踏ん張れない。ビルの一辺は長さ二十五と四十で、両隣のビルとの隙間はどちらも一メートル」
吉村が言葉を受けて屋上の平面図を確認し、全体図のページに戻った。それらを熟視したあと、ぱたん、と音をさせて図面を閉じる。目の前で吉村が腕組みをし、心持ちうつむいた格好で黙り込む。上に引きつけられた瞳が小刻みにあちこち動き始めた。

こういうとき、吉村がどういう状態に入ったか、すでに知っていた。脳の中身をのぞいているのだ。

頭のなかでは次々と完成された形の機械図面が浮かび上がり、一部を採用したり、消したり、新たに描き上げたりを繰り返しているのだ。図面は一度見れば充分で、データはすべて頭のなかに整然と納められ、必要に応じて出し入れできる。その速度はパソコンで検索するより早い。

一種の天才だ。

やがて、ぴたりと吉村の瞳の動きが止まった。

「レールなし、タイヤ型ならどうだろう」

言いながら、ふたたび閉じた図面をひらいてページを繰る。機械設備のところまでめくって、エレベーターの図面を押さえた。

「積載荷重が一、〇〇〇？の十五人乗り。建築基準法の安全基準があるから、一、二五〇？までならいける。それでもレールは載らない」

「載らねえな」

重さはなんとかなくても、長さが問題になる。短く小分けにする

と、レール自体の溶接工程が増えて工事期間も金額もあがる。それ以上に、つなぎ目が多いと高速道路を吹っ飛ばす軽トラみたいになっってしまう。現在もっとも多い形のゴンドラは、電車のように二本のレールの上に載って走行するしくみで、しかも頭でっかちだ。四角い本体から一本ないし二本の鋼鉄製の長いアームが伸び、そこから太いワイヤーロープを垂らして人間が乗るバスケットをぶら下げるのだ。動かすたびにガタガタ揺れては、構造物の壁面にぶつからないとも限らない。ゴンドラのカゴが地上に近づけば近づくほど、ワイヤーロープが長くなり振幅のはばが大きくなるからだ。

「だから、このさいレールを撤去してしまえばいい、と思う。それなら、ゴンドラだけ分割したものを屋上で組み立てるだけだから、工事費用がすこし浮く。隣接するビルとのあいだは、以前からイスタ型だろう？」

「それも使っていないらしい」

「でも、従来品がある。それは納品するだけだから」

北原はデスクに片肘をついて顎を支えた。感心しながら吉村の顔を眺める。この短い時間でよくここまで考えつくものだ。

さっそく、イスタ型ゴンドラの単価を頭の中の見積もりに入れ、工事工程を積算していく。

「自走式の値段は？」

「それも従来型のバリエーションを使えばいいよ」

つまり、新しい図面をひく手間がかなり省ける。

北原は頭のなかで電卓を弾く。カチャカチャ、チーンとレジスタの音がした。

「粗利、四割で決まりだ」

「ひどい数字だな、北原」

吉村があきれた表情になる。

「非情と言えよ。取れそうなところから利益とつとかなないと、マズイんだよ」

ありがとさん、と図面を閉じて膝に置く。すぐに席を立たず、し

ばらく恋人の顔を眺めた。図面を両手でつかんでいないと、触れたい気持ちがあらずと指先でうごめいて動き出しそうになる。

「吉村、それじゃあ、今夜のリクエストは？」

低く、囁くように、訊いた。

2DKのマンションのリビング・ダイニングには、ビートの効いた音楽が溢れていた。部屋の真ん中にベランダを向いて濃い藍色の大きなソファがあり、壁面にくっつけて置かれたテレビボードの隣のコンポがディスプレイの色を、赤からオレンジ、黄色、緑、青とリズムのまま次々変えていく。北原は、シンクの前にあるカウンター・テーブル越しにその音楽を身体で聴きながら、キッチンでレンガ色の深い耐熱皿に指でバターを塗っていく。

皿は、二枚。まな板の上には銀色のボウルがあって、彩りも鮮やかな茹でられた野菜が入っている。ニンジン、ブロッコリー、ジャガイモ、カボチャ。ちぎったリーフレタスにカイワレ、ミニトマト。傍らのコンロでは、ホワイトソースがからまったマカロニやエビやイカが湯気を立てていた。

「よし……！」

ワイシャツの肩にかけていた布巾で手をぬぐい、鍋を取り上げる。皿の上で慎重に傾けながら、木べらで少しずつ流し入れていく。分量は、一方の皿のほうが多めだった。仕上げにチーズをたっぷり散らしてオーブンに入れた。

シーフード・グラタン、というのが吉村の夕食のリクエスト。だから北原は、仕事帰りに駅前の大きなスーパーに寄り、レジで営業鞆のなかからエコバックをひっぱりだすと食材をつめて帰った。そうして、ホワイトソースを作るところから、料理を始めた。

市販のソースは味が濃い。缶詰は手軽で助かるし、自分ひとり分ならそれで済ませたろう。しかし、恋人に食べさせるとなると別だ。面倒でも一から手作りしたい。それに、みずからの才能をこれほど生かせる相手は恋人だけだ。超がつく偏食王の恋人が口にして、お

いい、と言ってくれることが喜びだ。

茹でたジャガイモをペースト状になるまでつぶし、そこに牛乳とモツアレチーズを加えてとろみを出す。最後の仕上げに生クリームを加えると、自然な甘さの特製ホワイトソースが出来上がる。作業のあいだにマカロニを茹で、シーフードを炒めて白ワインでフランベしておく。三ツ口コンロは必需品だ。フードプロセッサーも

料理が趣味で得意だということを、北原は周囲に黙っていた。自分の外見がひとに与えるイメージと、料理やお菓子作りが趣味、というのはあまりにそぐわないという自覚がある。じつさい、営業で出会う人々はいつもスポーツの話題を振ってきた。身長が一八五センチ、体重九五キロで肩幅が広く胸板の堂々とした体格ではスポーツをしている、と思われても仕方がない。が、本当のところ今はせいぜい腹筋や腕立て伏せぐらいしかやっていなかった。

サラダにドレッシングをかけてポウルのなかで掻きまぜながら、ふっと、北原は相楽からの頼みごとを思い出した。

頼むよ、北原君。カロリーの低いクリスマス・メニユーを考えてくれないかな。ケーキのレシピ付きで。

(あいつ、ケーキまで焼くつもりかよ)

まあ、俺も今年は焼くんだが、と思いながら食器棚からガラスの器を出してきてサラダを盛りつける。

「チキンは脂を落とすためにも蒸し焼き、サラダはマヨネーズを避けてレモン風味で」

コレステロールや脂の少ない素材と調理法を思い浮かべる。頭のなかに、まるでレストランの写真付きメニューみたいに色鮮やかな完成品が、次から次へと浮かぶ。出来上がりを想像するだけで、料理の味や香り、歯ごたえまでがありありと実感できる。

問題は、ケーキだ。

初心者の相楽はまず、道具を揃える必要がある。計量カップ、スプーンにスケール、ケーキの丸型、粉ふるい。

(惚れてんなあ……)

恋人のためにがんばろう、という相楽に親近感がわく。だからこそ、一肌脱ごうという気にもなったのだが　作るのはケーキだ。大丈夫だろうか。

（低カロリーのケーキ、か）

呟いたところに、携帯が鳴っていた。

はっと顔を上げて取り分け用のフォークとスプーンを傍らに置く。身を乗り出して手を伸ばし、カウンターテーブルの上の携帯を取った。

「響、いまどこだ？」

仕事のときは吉村、プライベートでは響。職場で下の名前を呼ぶものなら、こっぴどく叱られる。公私混同したくない、と足掻くところがまた可愛い。もっとも、お互いときどき失敗する。

「駅に着いたとこ」

返事を聞いて、さっそくオープンに向かった。タイマーをセットしボタンを押す。

「気をつけて帰ってこいよ」

うん、という素直な返事に切れた携帯を胸にあてて、満足そうに息をつく。それから、いそいそとテーブル・セッティングにとりかかった。

駅からマンションまでは歩いて三〇分ほどだ。バスが出ているが、車に酔いやすい恋人は歩いて帰ってくる。その時間を計算して、北原は手早く部屋の中を片づける。

朝、着替えたままソファに放り出してあったルームウェアをまとめて、寝室のカゴに入れておく。置きっぱなしの営業鞆は、反対側の部屋に片づける。

東京に異動が決まって会社が用意したこのマンションは、景気がよかった二十年以上前に資産として購入されたものだ。リビングを真ん中にして六畳の洋室が左右に振り分けられている。

当初、北原がルーム・シェアを強制された相手は一緒に仕事をし

たことがない男だった。半年後にその男が地方に異動となり、代わりによつてきたのが吉村だった。離ればなれの半年は、互いの絆を確かめるいい機会になった。もう、その手を放すことは考えられない。

（俺たち、一緒に暮らして三年が過ぎたな）

目覚めたときに恋人が、隣にいるのが当たり前になっている。

感慨にふけっていると、玄関から「ただいま」という声が聞こえた。

いそいで出迎えに向かうと、そこでは吉村がマフラーをほどきながらスリッパを履いている。

「おかえり」

応えるように上げた顔の表情が柔らかい。職場で見せているよそよそしさはかけらも見あたらなかった。

脱いだグレーのコートとマフラーを吉村の手から取り上げ、床に置かれた鞆を持ち上げる。

「寒かったか」

微笑みながら、訊く。

「まだ、十二月の始めなんだよな、これで。去年も寒かったけど…、俺もう、どこか南の島に引越したい」

手袋を外しながらため息をつき、片方の手のひらで耳を覆っていた。しきりに指を動かして耳を揉んでいるのは、凍えて痛いかららしい。指が動くたびに耳にかけている眼鏡のツルが動いて、形のいい鼻の上でレンズが踊る。

廊下を歩きながら首を捻って吉村を見下ろし、北原は子供みみたいな仕草に微笑む。吉村が気づきませずに手袋を持ち替えて、反対側も同じように暖めていた。

「俺がやってやるぞ」

リビングに入ってコートや鞆をソファの上に置くと、振り向いて吉村の前に立った。両手で小さな顔を挟むように耳を覆ってやる。手のひらのなかの耳は、氷みたいに冷たかった。

吉村が目を閉じ、眼鏡を外す。

「あつたかい……」

本当に気持ちがいいらしい。深いため息を漏らしたくちびるが閉じられることなく、かすかにひらいたままだ。ゆっくりと耳の軟骨を指先でさすってやると、またため息をつく。白い前歯がちらりとのぞいた。誘われて、背中を丸めるように頭を下げるとキスをする。小さな音をさせて、キス。上くちびるをそつと噛み、下くちびるをやさしく吸う。吉村が応えて、それは長いキスになった。吉村にキスの途中で「いい匂い」と呟かれ、ようやく終わる。ずっと部屋にいたから気づかなかつたが、たしかに甘い牛乳の香りとチーズが焦げる匂いが部屋中いっぱい詰まっていた。

「食おうか」

「おなかすいた」

腕の中から見上げてくる顔が、子供のようになっていた。

グレーのセーターにジーンズ姿で席に着いたのを見計らって、オーブンから皿を取り出す。分厚い鍋つかみ越しでも、火傷しそうなほど皿が熱い。こんがり焼けた表面がプツプツと弾け、ホワイトソースが煮えている。仕上げに、粉チーズを振った。

「いただきます」

と吉村が待ちきれなさそうにフォークを取り上げ、真ん中に突き刺す。そうして、ちよつとずつ左右に焦げ目を分けてクリーム色の中身を露出させる。白い湯気が立ち昇り、フー、フー、と息を吹きかけはじめた。

猫舌。舌の耐熱温度が低い。

一生懸命に息を吹きかけてマカロニの表面が乾いた頃に、やっと一つを口にする。フォークの先に突き刺さったエビは、ほんのり赤く色づいてくるりと丸まり、糸をひくチーズとからまっている。フー、と息を吹いて冷まし、口にいれてしばらくしてから、「おいしい」と笑顔を見せた。

北原は、満足した。

この顔見たさにいつも、料理をする。ひどい偏食を治すために、メニューを工夫する。素材そのままの形が無理なら細かくしたりすりつぶしたり、他のものに紛れ込ませて食べさせてきた。食事の雰囲気にも気を配り、「食べることは楽しいことだ」と覚えさせるのに二年以上もかかった。

グラタンを三分の一ほど食べたところで、思い出したように吉村が言う。

「あさって」

「うん」

「部の飲み会があるから、いいよ」

お、と北原は短く了解する。

「それなら俺も、どこかで食って帰るよ」

ばかり、とグラタンを放り込み、たくましく顎を動かして咀嚼し、飲み込んで付け加える。

「そっぴやウチも、そろそろ忘年会だろう」

すっかりそういうシーズンだ。仲間同士で飲み、課で飲み、部で大きな飲み会をする。もっとも、北原はすっかり酒とは縁を切った。無理をして辞めたのではなく、幼少期に酒乱の父親のため甚大なトラウマを負わされた吉村を想っていたら、いつの間にかそうなっていた。

「でもさ、貴志……」

「うん」

「いままで外で食べて、貴志のごはんよりおいしいと思ったこと、ないよ」

北原は、フォークを中途半端に持ち上げたまま、目の前の恋人の顔を見る。そうして、微笑した。

「あたりまえだ」

山盛りのマカロニを、口に入れた。

食事の後かたづけもすっかり終わり、湯上がりのさっぱりした格

好で北原はテーブルにつく。入れ違いに入っている吉村は、まだしばらく出てこないだろう。

テーブルの上に豪華な写真入りの料理本を積み上げ、ボールペンを手にすると、おもむろにページを開いた。

前菜、メインディッシュ、付け合わせ、と様々な組み合わせを本のページをめくりながらレポート用紙に書き出していく。一度書いたものを上からぐしゃぐしゃと黒く塗りつぶし、新しいものに変えては、少し考えてまた元に戻してみる。

(訊いときゃよかったな)

相楽の料理の腕前が、わからない。

どういう料理なら作れるのかを知っていれば、腕前の検討はつく。オーブン料理ができるなら、チョイスの幅も広がる。しかし、ケーキを焼くつもりでいるのだから、たしよ自信があるのだろう。

マスタートド風味のコールド・ポーク。

温野菜のレモン・ドレッシング。

野菜だけのコンソメ風味寒天ゼリー。

メインディッシュは蒸し鶏のわさび風味ソース。

そこまで書いたところに、吉村がやってきた。いかにも風呂あがりです、とはちみつ色の肌がほんのり赤く染まっていた。

「それ、なに？」

「頼まれたクリスマス・メニュー」

「誰に？」

ペンを置いて、吉村を見た。パジャマ代わりのスウェットの上下は色違いのお揃いで、吉村がグレー、北原はくすんだグリーンだ。

「システムの相楽。おまえが言ったんじゃないのか」

「なにを」

きよとん、とした顔をしている。

「料理が得意だ、って言っただろう」

あー、とまぬけな声をあげた。

「ごはんは貴志が作ってくれる、ぐらいは言ったかもしれない」

椅子を引いて前に腰を下ろし、両足を引き上げると膝を抱えて小さくなつて座った。

「ほんとは、自慢したかも」

つけ加えてちらり、と舌の先を見せる。ちよつとしたいたずらを見つけられた子供みたいな表情だった。

「まあ……、俺もやるかもな」

機会と相手さえあれば、たとえ嫌がられたところで無理矢理にでも聞かせるだろう。

目に見えるようだ。

俺の恋人はからつきし料理がダメで。いや、ダメどころかまともに台所にいたためしがない、つてぐらいなんですけどね。それでも、俺がオムライスやカレーを作つてやると、おいしい、おいしいって喜んで食つてくれるんですよ。それがもう、ほんとに可愛い顔だね。

（アホか、俺は）

放り出したペンを取り上げ、レポート用紙をめくつて新しいペー
ジに替えた。

料理本のカラーページをめくりながら、目についたメニューを書き出す作業に戻る。吉村の手が伸びてきて、傍らに積み上げてある中から一冊抜き取つていく。

「そついや、相談したあのゴンドラの図面……」

「俺がやるよ」

「いいのか」

ちよつと顔を上げて吉村を見る。吉村は、銀色のアイシングもまばゆいケーキが表紙の本を広げて、ページを眺めている。

「ほかに誰がやれるんだよ。設計部で組立式ゴンドラを最初に設計したのは俺なんだ。初の実機がビルに載つたのは今年の春。やれるのは俺だけだよ」

いっしゅん、仕事のとときの表情が吉村の面をかすめる。静かで無口という第一印象を裏切る、強烈な仕事にたいする自信。

たとえゆで卵ひとつ満足に作れなくとも、包丁でリンゴの皮が剥けなくとも、これがあるから好きなのだ。景気の逆風に吹かれながらもメゲずに外回りが出る、理由のひとつは吉村だ。

俺はこいつに負けていられない、という気にさせてくれる。

「……響」

北原は、そつと手を伸ばして吉村の手を取ろうとした。

「あ。これ、おいしそう」

「え？」

「ほら、これ」

本をくるりとひっくり返し、開いたページを向けてきた。そこに載っているのは、真っ白なケーキだ。四角いガラス容器に地層のように、黄色のスポンジ、黄身色のクリーム、真っ白な生クリームが重なり、トッピングに彩りも楽しいフルーツが何種類も乗っている。本を受け取って、子細に眺める。ページの右下に書かれた材料や手順を見ると、意外と簡単そうだった。

「食べてみたいか？」

「いい？ 作ってくれる？」

「まかせとけ」

言ってから、相楽のクリスマス・ケーキもこれならいけそうだと思う。材料通りにするとカロリーは千キロを越えるが、少しずつ変えて落とす方法はある。

スポンジに牛乳を使わず、カスタードを牛乳寒天にし、生クリームはレモンを加えたヨーグルトクリーム。トッピングのフルーツを缶詰からフレッシュ・フルーツにして食べる量を抑えてしまえば、カロリーは半分以下になるだろう。

「いいこと、言ってくれたよ。頼まれたメニューが出来そうだ」

そう、と言って吉村が微笑む。北原は椅子を鳴らして立ち上がると、テーブルに両手をつけて身を乗り出し、音をさせてくちびるにキスをした。

「こんどの休み、ツリーを飾ろうな」

「うん」

土曜日の午後、ダブルベッドを置いた部屋のクローゼットの袋戸棚からツリーの箱を取り出した。

「今年は、どこに置く？」

「去年と同じでいいんじゃないかな」

吉村が答えて、リビングの窓際、テレビ棚の隣に設置する。

三年前は、ツリーを見たときの吉村の反応を危ぶみながら自分でこっそり組み立てた。

去年は二人で一緒にやった。

今年は率先して吉村が組み立てている。

およそ図面と名のつくものなら何でも、一目見るだけで頭のなかにストックされてしまうから、まったくまごついたりしない。高さ一二〇センチのツリーをらくらくと組み立て、格好がいいように枝を広げていく手つきがリズムカルだった。

一年間、窮屈な箱の中で過ごしていたツリーの緑の枝は、プラスチックの葉が折れてくしゃくしゃと縮れている。それを一つひとつ、細くて長い指がていねいに整えていくのを、北原は暖かい気持ちで眺めた。

別の箱から天使の人形や、赤い服のサンタ、銀色の星に白い雪の結晶などのオーナメントを取り出して、吉村の手のひらに載せてやる。

吉村の横顔が、ベランダから入る日差しに照らされて輝いていた。長い睫がまばたきのたびに、きらきらと光を弾くのについて見とれる。クリスマスや正月、誕生日といったイベントで、北原は長いあいだ恋人から期待通りの反応をもらえなかったのを思い出す。

「おめでとう」と言っても困った顔をされ、プレゼントを渡しても所在なさげにリボンのかかった箱をいじりまわして申し訳なさそうにする。吉村のなかに刻み込まれた幼い頃の記憶のせいだった。

「この雪、足りなくない？」

最後の白いパンヤを両手で広げながら、吉村が言う。

北原はあぐらを掻いた重心を後ろに移してのけぞるようにし、少し遠くから出来上がりつつあるツリーを眺めた。赤や青、銀色や金色のモールがツリーにくるくる巻きつき、雪代わりの綿があちこちの枝に積もっている。

「LEDのライトを点けたら、印象が変わるんじゃないか？」

「……そうかな」

納得いかなさそうな表情に、微笑を誘われる。

「夕方、買い足しに行こうか」

提案すると嬉しそうに振り向いた。

その夜は、ツリーのライトを一晩じゅう点けておくことにした。

夜中にふっと目が覚めた。

暗闇のなかで頭を横に傾けると、隣で眠っているはずの吉村がいない。目が覚めたのはそのせいだった。

トイレかな、と思ってしばらく待ってもベッドに戻ってこない。

北原はベッドを抜け出すとスリッパをつっかけ、リビングとの境にあるドアを開けた。

一定のリズムで点灯を繰り返すツリー。

赤、青、緑、黄色、白……。

リビングの壁や天井を、色のついた光がほのかに反射して彩っている。吉村がその中に立って、じっとツリーを見下ろしていた。まるで光の渦に抱かれているように見えた。

「……響」

「ごめん。起こした？」

「いや、とあくびをかみ殺しながら隣に立つ。

「どうした？」

「なんか……、ちゃんとツリーがあるかな、と思って」

吉村の肩に手を置いて、抱き寄せる。頭の上に、顎を乗せた。

「子供のころ、夜中にこっそり電気を点けてみたことがあったよ。

すごく小さなツリーだったけどね。見つかると怒られるからすぐに

消すんだけど、まっくらな部屋にイルミネーションがキラキラして、両親の寝顔に映って、光の音が聞こえるみたいだった。それで、家のなかがね、すごく静かだったんだ」

腕の中の吉村の身体は冷えきっていて、いよいよ強く密着するよう抱きしめる。

「世界が死んだみたいで静かで……、安心できた。もう誰も、目を覚まさない方がいいのに、って思ったんだ」

抱く腕に力をこめると、吉村の腕が背中に回ってくる。

「俺、おまえといるとそんな感じなんだ。一緒にいても静かで、落ち着けて、光の音が聞こえる」

それは、どんな曲だろう。恋人が聴いている音のない光が奏でる音楽は、どんなものだろう。

北原は身体を離して吉村の瞳をのぞきこむ。微笑みが返ってきた。

「ベッドに戻ろう、響」

「……うん」

休み明けの月曜日、北原は仕上げたクリスマス用レシピを相楽に渡すために休憩室に呼び出した。

昼前の休憩室にはほとんど人がいない。喫煙ブースで年輩の男がひとり、せかせかと煙を噴き上げているだけだ。

待っている、慌ただしく相楽が飛び込んでくる。奥の人影に気づいて頭を下げた。

「あのおやじ、誰です?」

訊くと、総務の部長代理だ、と相楽が答える。

「へええ」

異動してきて一年半も経つのに、知らない顔ばかりだ。いまだに顔を出したことの無い部署が多かった。相楽が所属しているシステム部もその一つだ。

「これが、頼まれものです」

脇に挟んでいたクリアファイルを渡す。きちんとホッチキス止め

をした献立の表紙には、クリスマスリースで囲んだメニューという文字を印刷してある。

「……凝ってるねえ」

立ったまま手でA4サイズの用紙をめくりながら、相楽が感嘆の声をあげた。

「写真があるほうが、出来上がりをイメージしやすいですし、なんせ特別メニューですからね」

「デキる営業マンは、さすがに言うことが違うね」

おどけたような短い口笛が休憩室に響いた。

「どうです？ それ、作れそうですか」

「やるよ。ケーキもチャレンジしてみる。 ありがとう、北原くん」

どういたしまして、と北原は破顔する。

仕切りのドアが開いて、部長代理がせかせかせかした足取りで休憩室を出ていく。それを二人して見送る。

「ところで、訊いてもいいですかね」

「なにをだい？ 北原くん」

コホン、と乾いた咳払いを一つする。なんとなく周囲を見回してから、小声で訊いた。

「本当にもう、響……吉村には、これっぽっちも興味はない？」

一拍おいて、相楽が大きな笑い声を上げた。

「君は、心配性だな」

「ほつといてくださいよ」

ぷい、と鼻にしわを寄せて横を向く。笑い声はまだ、横顔に弾けてコロコロと落ちていく。

「僕は、彼が好きだよ。でも、それはもう違う意味での好きってことだよ。彼からは幸せそうな匂いがするから、見ていて楽しいんだ」

相楽が手でメニューを筒状に巻いた。

「彼をそんな雰囲気させているのは、君だろう？ それを、羨ましいと思う。僕もはやく、恋人をそんな風にしてやりたいね。これ

は

筒状のメニューで、相楽がポンと肩を叩いてきた。

「僕にはそのステップのひとつだよ」

北原は、相楽のおどけた表情の影に隠された真剣な想いに気づいた。

「わかりますよ、それ。頑張ってください」

「ありがとうございます」

昼休憩のチャイムがフロアに響く。急にあちこちからざわめきが沸き起こり、三々五々、部屋からスーツや制服姿の同僚が廊下に姿を現す。

それじゃ、と言った別れぎわ、ふと相楽を振り向いて訊いてみる。「そっぴや相楽さん。モデルって」

「ああ……、教えてなかったかな。環状線 駅の南改札口を出た正面ビルに、でかい広告があると思うんだけど」

あれかな、と脳裏にそのビルを思い浮かべた。八階建ての凝った意匠をほどこした銀色のファッション・ビルだ。三階までがショーウィンドウになっていて、クリスマスらしい飾り付けがされている。通勤と仕事の移動でしか使わないから、あまり気にして見ていなかったが言われてみると巨大な広告があったように思う。

「その中に、いるよ。当ててごらんよ」

頷いて、今度こそ本当にそこを離れた。

相楽と別れてすぐに、北原は設計会社からの呼び出しに応じて会社を出る。

くだんの駅の改札を慌ただしく抜けようとして、背後を振り向いた。相楽が言っていたビルの四階部分にある、巨大な広告が目飛び込んできた。いままで、気づかなかったほうがおかしいくらいだ。約束の時間にはまだ余裕がある。

北原は改札を離れて、広告がよく見える位置まで移動した。

広告は、ジュエリー会社の宣伝らしい。横長のサイズで、左から

ピンク、ダークレッド、コバルトブルー、黒に色分けされ、それぞれを背景にひとりずつモデルが写り込んでいる。そのうち、ピンクとダークレッドは女性モデルだから問答無用で排除していい。

残るは二人。

しかし、迷う必要もなく北原には相楽の恋人がわかった。以前、大阪に出向してきたときに吉村を口説こうとした男だ。外見の好みはわかっている。

(外国人かよ……)

淡い色の髪に、薄い色の瞳。肌の色が透き通るように白くて、顔立ちは整っているというよりフアニー・フェイスというのがぴったりにくる。広告のコンセプトのせいかもしれないが、嫌みのないキュートな雰囲気醸しだしている。

「なるほどなあ」

相楽と二人でいるところを想像して、迫力のあるカップルだろう、とため息をつく。

「でも、ま」

響の勝ちだ。

さっさと結論つけて背中を向けると、改札を目指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3612q/>

サイレント・ミュージック

2011年1月23日17時40分発行